

『其のX、真央。初恋・地獄篇』

小野寺那仁

島内理紗は本祭の日も浴衣姿で来ることはない、と真央は踏んでいた。あくまでも祭りに参加しようとはしない。冷たい無機質なレンズを通してこの雑踏のエネルギーを汲み取るつもりなんだろう。

何年かぶりに水玉模様の浴衣に袖を通すと羞恥心も蘇る。家の中では家族がもの珍しさからじろじろと眺められたのが気になった。とうとうおかしくなったのかと思われたのかもしれない。一連の復讐がことごとく失敗していたこともあって今度こそはうまくやりたい、なんとかして島内理紗の惨めな姿を村の人たちに知らしめたいと思ったが、まだうまくいやり方が思いつかない。

家を出て神社の境内に向かう。宿場町の軒が途切れてから先は、石畳の曲がりくねった古道が続いている。首のない斬られ地蔵が三体、夏草にうずもれている。その細い道を近隣から集まってきた見物客や遠来の観光客に混じって真央は歩く。にぎやかな声がそこからこぼれだす。祭囃子が遠くから聴こえてくる。老いた人にはつらいようであちこちから不満の声が漏れてくる。振り返れば足元には宿場町が見渡せられ、遠くには山脈が連なり街の周囲は緑の苑が広がっていた。夏の陽射しは徐々に掻き消されて影へと変わっていく。真央には珍しくもなんともないのだが、観光客たちはいちいち振り返ったり立ち止まったりするものだから歩調を合わせざるを得ない。

息を弾ませて鳥居をくぐると観光客たちはやや拍子抜けする。右手には舗装された新道があり、車が往来している。駐車できる場所は限られているので停車して人を降ろすことも戻っていく。露天商のワゴンや消防車など許可された車両が停まっている。

さっそく境内を舐めるように見回り理紗を探す。焦燥は頂点に達し、ふつふつと込み上げてくるものがあった。祭りの興奮状態が真央の気分を昂揚させていた。まるで山姥の命を受けたように理紗への復讐心がこの場所へと導いてきたのだ。そう感じたのはまさにその時に若衆の笛の音は「山姥の唄」であったからだ。

山姥の唄は哀切を伴った鎮魂の唄だった。

真央の高校生の時、物好きな他県出身の女教師が伝説の詳細を調査しようと思いつき、生徒たちを使って、神社や寺院に残る古文書を調べたりした。だが、記録は何も残っていない。そのうちにようやく八十過ぎた老人から話を訊きだすことが出来た。

山姥は姥捨てに失敗したある老婆だと言うのだ。数日後、猟師は強靱な老婆を猟銃で撃ちそこない追いかけるうち、老婆の拵えた落とし穴に嵌って、竹を尖らせた幾本かの槍が突き立てられていたために猪や他の動物同様に惨殺されたということだった。しかも猟銃も奪われた。それから数カ月の間は山に近づく旅人達が猟銃で脅されて金品や衣類を奪われた。何度か村に懇願して山姥との戦争を持ちかけたが、古者たちは反対した。表向きの理由は、村人の困窮のために負担はかけられない、地形に知悉した山姥に勝利するのは難しくこれ以上の犠牲者は防ぎたい。裏向きの理由としては、何と言っても山姥と化してもほとんどの家の親戚筋、あるいは幼女の頃からの知人であってそれを征伐するにはあまりに忍びない。姥捨ての風習自体が冷酷非道なものである。猟銃で撃つたのはそもそも姥捨て

てルールに違反したもので、罨にかかって死んだのも殺人でなく事故であり、猟師が罨にかかるのは恥だとか、正当防衛とかという声もあった。古老たちが喜んだのは事件をきっかけに姥捨て廃止の機運が高まり自分たちの待遇も変わり、目前に迫っていた姥捨ての日が解消されたことであつた。それからというものの山姥の祟りを懼れて神社の賽銭箱の脇に貧しい中から団子や粟やコメを置いていく者が増えていった。けして村人は憎悪しているわけではなくあなたに同情しているという意味の鎮魂曲がつくられてははじめのうちはおそれるおそれる必死で唄われたということだ。それはそうだ。ひとりの反逆者がひとつの村を滅亡させることは、実はそれほど難しいことではない。川から毒物を流したり家々を焼き払ったり散弾銃で撃ちまくるなどされたらひとまりもないではないか。その人は山姥の末路については知らなかった。あたかもいつまでも生存し続けたかのような話だった。

真相はつまびらかではない。犠牲者の猟師の妻は苦勞したので怨念混じりに孫に聴かせてそれが代々語り継がれて、直接関係のない人々はいつしか忘れ去り、都合の悪いことなので記録には残されなかったようである。

結局、女教師は公に調査結果を発表することはしなかった。古老の話は後世の作り話めいていて信憑性に欠けるし裏付けになる証拠に乏しい。話としても陰惨で生徒に広めるには教育的な価値があるとは思えなかった。観光パンフレットに掲載するにはマイナスイメージになりかねないと判断したので、たまたま記録者のひとりだった真央にも記録を廃棄するように求めてきた。言われるままに真央は封印したが記憶としては残った。その時は、気にも留めなかったが、物悲しい調べを聴くと他人事とも思えない。もはや人ではなかったかもしれないが。気分を落ち着けるためにメンソールを吸い込むと氷片が咽頭から肺へとまっしぐらに駆け廻り初めて快感を味わった。

宵闇が迫り、町内を練り歩いていった山車が戻ってくる。大太鼓が破れんばかりに打ち鳴らされる。若衆は一升瓶を抱えてラッパを呑みしている。社殿の前に山と積まれた樽酒が次々に蓋を割られて、誰かれにたく振る舞われる。すっかり酔いが回って足取りの覚束ない男もいる。真央は差し出された升を一気に干した。宮司が近寄ってきた。真央は慌てて、何気なく吸殻を捨てて足で踏みつけた。気づいた人の何人かは眉を顰めた。

「清造さんの娘さんじゃないか。まあ何とも珍しい。民子さんとはしょっちゅう話してるんだが、あなたは東京に行ってるものだと思ってきました、祭りだから帰ってきたの？」

「ええ、まあ」真央は俯いた。宮司は探るように覗くので化粧の薄い真央は恥ずかしく思った。

「そういえば、あの時以来ですね。あなたがまだ高校生だった頃。あなたは山姥伝説について調べていた。担任の、何ていう方だったかな。あの人。すぐに退職してしまわれましてね」

「私も忘れてしまいました。あつ、伝説について訊きに来たのは覚えてます。でも何を教わったのか、ちっとも覚えていない」真央は笑った。数年ぶりに笑った気がした。

「相変らず笑顔の素晴らしい御嬢さんですね」

「えっ」六十過ぎの男に云われても動揺することはないのだが世間と言うのはわからないものだと思つた。

「覚えていないも何も私は何も語っていませんよ。語るべきではないと思いましたがね。山姥の顛末はそれはもう悲劇的で。あなたたちが調べ上げた姥捨てに失敗した或る老婆が

山姥に化したというのは事実なんでしょうね。でも記録には残っていません。この境内にお供えものを捧げて山姥の怒りを鎮め山姥の延命を図ったのも確かです。そのまま冬になれば息絶えてしまうだろうと思っただけです。赦しを願う文書を供え物に添えて、また共に暮らそうと提案もされてましたが、山姥は猟師を殺めてます、旅人を襲撃すること数知れず様々な悪事にも手を染めてしまっていたから応じるわけにもいかず、そもそも文字が読めたのかも定かではない。もはや人ではなくなっていたと言っても過言ではない」

「宮司さん。あたしはすっかり変わってしまったんですよ。もう山姥伝説について調べてるわけじゃありません。それに……」

「それに？」

「あの時に話せなかったことをどうして今になって話そうとするのですか？」

「それは失礼しました。そんな話を聞かせたらあなたが村を嫌いになって何処か他所の土地へ行ってしまうような気がしたのです」

「ああ、そういうことですか。それなら構わないです。あの時は何も考えていませんでしたが、今はあたしは村が嫌いでも村人たちと話すこともなく明日にでも他の土地に行ってしまうと思うくらいですから！」

「そうなんですか。それは残念でなりません。でも仕方ないですね。村にはあなたと同じ年頃の娘はほとんど残っていないですからね。それなら山姥の顛末について語るのは止みましょう。気持ちいいこともないでしょうし。また気が向いた時にでもお話ししましょう。」

あそこに小屋があるでしょう。あの小屋は再建されたもので当時のものではないですが、あそこにはしばらく山姥が住まっていたという言い伝えもあります。冬の寒さを逃れるように村人たちが造ったんでしょうね。それも言い忘れてました」

自分は知りたかったのだろうか。いや話を遮ったのだから知りたくはなかったのだろう。どのみち悲惨な最期だったに違いない。家には祖父もいたが婿養子だったので彼は余所者で村人との付き合いが少なかった。元はと言えば復員兵だった。

何人かの神社世話役が宮司をせかすように社殿へと連れ去っていった。辺りはすっかり暗くなり篝火だけが明るく燃えていた。人だかりは目に見えて増えてきて社殿の前はびっしりと人で埋め尽くされた。理紗を見つけるのも難しい。真央は自由に動き回ることもできない。険しい山を切り開いた神社なので社殿前の広場は狭かった。車座に人々は思い思いに自分の敷地を確保し始めている。鳥居から参道までの石段あたりはもう先に進めないのにどんどん人が集まってくる。並んだ露店の周囲にも人が溢れてきた。想定を超えた人手のようでも神社世話役たちはトラロープを花火の打ち上げ台や手筒の周囲に幾重にも張らざるを得なくなった。社殿の背後の林にも人々は入り込んだ。クスノキの大木には子供たちが攀じ登った。人々は暑いだの早くやれだの勝手なことを口走る。狭い村にこんな人がいるはずはないのでほとんど九割くらいは何処からか押し寄せた観光客か花火マニアに違いなかった。駐在や消防の数が圧倒的に足りずにハンドマイクで「危険だからさがってください」と声を漕らして叫んでいる。

酒が廻ってきたのと人いきれで暑くてたまらない。和太鼓の音が煩わしい。真央は社殿の脇に立っていたがあまりに暑くて林の中へと入っていく。そこには人はあまりいない。梢で花火がよく見えないからだろう。そこからは神社内部がよく見渡せる。神妙な面持ちで竹笛を吹いているのはやや滑稽だった。かわいらしい少年たちもこの時ばかりは絆纏を

まとって現れ、親たちが拍手喝采する。巫女はまだ小学生ではなかるうか。希望者か厄年の人たちか、お祓いを受けている。さきほどの官司が出てきて祝詞をあげる。

「あら真央じゃない」

髪を茶色に染めた女と眼が合うと間髪いれずに話しかけてきた。彼女の手はまだヨチヨチ歩きの幼児に繋がれていた。子供を挟むように精悍な男が寄り添っていた。思いのほか童顔だった。真央は咄嗟には思い出せなかった。会釈するとしばらく一方的に話した。話していても誰だったのか思い出せない。女は尚も話そうとするがいちいち自分の近況を話さなくてはいけないからもう行くわね。坊やが踏みつけられないように気を付けてね」

「待ち合わせがあるからもう行くわね。坊やが踏みつけられないように気を付けてね」
「ホント、そうよね」

テンポの速い曲に変化していた。手際よく進行していく。いよいよ手筒花火がワゴンボックスから運び出されて準備される。

一眼レフを構えた島内理紗をついに見つけた。真央はほくそ笑んだ。良いポジションを取るのが仕事であり、かなり若衆に接近してくるのは予想できたことだった。若衆が理紗に気づいてふざけたポーズを取っているが、笑顔で愛想は振りまくもののシャッターは切らずレンズは別の方を向いている。

真央は理紗に残り十メートルくらいまで接近したものの、人垣に阻まれて理紗を視界にとどめておくのも難しくなってくる。

平成の大合併でこの村は村ではなくなった。山ばかりであるが一応は市ということになる。同時期に幾つかの集落が祭りを行うので市長はいちいちは現れない。代わりに区長（もともとは村長だった）である美作栄治氏と神官が簡単な挨拶をしているようであった。というのもマイクを使っているその声は群衆の声にかき消されてほとんど伝わってこなかったからである。消防署員も何人かはいるが、やはり各地区に分散しているために担当は村の消防団が大勢を占めている。消防団員は花火を担当する若衆が主力であるから消防の法被を着て居並んでいるのはOBである。彼らがあらかじめ備え付けられている打ち上げ花火の発射台近くに消火用の水のはいつたバケツを運んでいた。業者もいるし、不慣れな手筒を操るのを教えてくれた遠い他県の人たちもいる。署員からの注意事項の説明もあったが、区長の声よりも遥かにかばそくて何を言っているのかほとんど聞き取れなかった。理紗は市の広報誌からも頼まれてるのか、神社の儀式や村の行事なども撮影していた。数日前から村人たちのひとりひとりを撮影し、ここでは消防からゆきずりの観光客までなんでもかんでも写していた。そのカメラの先を追うとひとりの消防署員が目飛び込んできた。ヘルメットを外した男は丸刈りの逞しい男だった。柔和で端正な顔立ちが歌舞伎役者に似ていないこともない。真央は理紗に無性に嫉妬し始めていた。やがて理紗は彼に近寄って何やら言葉を交わしているではないか。眼を凝らしても彼の名札は見えない。真央は理紗は彼を好きなのに違いないのだと思いついた。若衆に対応するときとはまるで違っている。さらに接近していく。人混みをかき分ける。何人か押しつけた。子供を突き飛ばしたような気がした。彼をもっと近くで感じてみたいと思った。どうして、ときめいているのだろう。いや、これは理紗が彼と親しくなるような予感のなせる業でそれをなんとか阻止したいのだ、或いは、理紗が真央の失態を撮影した写真を彼と二人で嘲笑するのも防ぎたい、とかいろいろと想いを巡らせているが、なんだか、もっともっと純粋な感情でもあ

ったような気がするのだ。遙か昔には持っていた、誰に対して抱いたのかすっかり忘れてしまったが、わくわくするような感触が蘇ってきたのだった。

真央が彼の目の前に立ちほだかった時、彼は目を丸くした。同時に理紗の顔にも突如現れた闖入者に戸惑いの表情を浮かんでいたが、真央は気づかない。

彼の首からぶら下げている名札を一瞥で読み取る。むらかみたくや。

「あら、たくやくん。お久しぶり！」真央は、彼に抱きつくようにしがみつくと化粧の薄いのも忘れて、顔を彼に近づけた。

「やあ、お久しぶりですね」と言いつつ、村上は身体をゆっくりと引き離れた。きつと村上の頭の中は遙か以前の同級生か、キャバクラ嬢のひとりか、署の宴席のパーティーコンパニオンの誰かか、あるいは最悪の場合は、彼の元彼女の変容を遂げた姿かと思いついてはいるに違いない。だが村上は悪い気はしなかった。真央は美しいとは言えないが、表情が異様に輝いていて何らかの真実味を感じさせるには十分であったからだ。だから以前の知り合いだろうと納得したようであった。また危険な人物でもない。

「今はどちらにお勤めなの？」

「新島支所に去年から配属です」

それだけ訊きだせば充分だった。村上は「誰だろうか？」と疑問を抱きつつ会話をつなぎ理紗には微塵も関心を払わなくなっていた。やがて第一弾の打ちあげ火花に点火が始まり轟音と共に夜空に光の大輪を開いたので、村上は慌ててヘルメットを被り、自分の持ち場へと向かって行った。

「また、のちほど」

「ええ、絶対ね！」思いがけない言葉だった。ついに道は開かれたのだった。極彩色の光や色をまぶたに焼き付けるほど見つめ続けた。「絶対に手に入れる」

隣に立っている理紗は今度は大輪を撮るのに夢中になっている。

「あなたね。あの写真消したでしょうね？ デジタルカメラなんですよ？ 意味ない写真は消すよね」真央は訊く。

「だいたいあなた誰？」

「壊れた日傘。覚えてない？」

「ああ、ああ、あの時の」

理紗はこちらを見ずに受け答える。今度は観客の、特に子供たちの表情を追っているようだ。

「ああいうのも面白いんじゃないの？ もちろん残してあるわよ。見たいの？」

「だから私が納得しない写真をあなたはどうして所持してるの？ 肖像権の侵害でしょ」

「私は決定的な瞬間が好きなの。中年の小太りな女が不似合いなハイヒールを履いてひっくりかえった。面白いじゃないの。そういうなら表現の自由の侵害ね。だいいち、あなたの顔が映ってないから誰だかわからないはずよ」

「まあ、なんて人なんでしょ！」

「そういえばあなたの写真ってなかったと思うわ。脚だけなんて気の毒だから、一枚撮ってあげようか？」

「いらぬわよ。そんなもの。こんな田舎で生活してる人もいる！ みたいな偽善的な写真集でも作るんでしょ。あんたの事、ネットで調べたわよ。なんで私たちはタダであんた

の金儲けの道具にならなきゃならないの？ 都会の女に撮影してもらったって喜んでるのはモチない若衆くらいじゃないの」

「ああ、ああ、そうですか。どんなところにもひとりやふたりはいるわね、あんたみたいな天邪鬼が。そんなの気にしてたらこの仕事は勤まらない」

「おまけに元彼にまで手を出そうとしてさ！」

ぐしやりとハイヒールで何かを踏みつけた気がした。

「あ、あたし、何にもしてない」強気な態度が影を潜めた。明らかに動揺してこちらを見ている。それから真央はねちねちと理紗を言葉で責め続けたが、何を言っても理紗は振り返らず反応しない。やがて人ごみに紛れて理紗の姿を見失なった。

みな二年ぶりの花火にうっとりとしていた。花火自体は都会の花火大会に比較するところやちなものだが、打ち上げ台から離れていないから迫力が違う。もし都会だったら数万円も支払わないと見られないような特等の場所でもあるのだ。ひと通り通常の花火が打ち上げられると次はいよいよ手筒に移る。竹を細工した花火は若衆自身の手で作られたと説明がされる。もちろん、専門の人々の指導によるものなので安全と思われるが万が一を考えてあまり手筒には近寄らないでほしいと付け加えられた。人々に緊張が走りやや後ずさりした。トラロープはますます押された。押してはダメと世話役が慌てて注意する。子供の何人かが若衆の周囲を走り回っている。するとまた理紗が悠然と歩いているのが見えた。誰も注意しない。

若衆の何人かがふらふらとしている。「では、はるばる他県よりお越しいただいき御指導いただきましたオコゼ組の方々の模範演技を見てもらいます！」とアナウンスがあり、おおっと歓声がこだました。ちよろちよると初めは小さな火であったが芯に到達すると凄まじい火柱が立ち上がって炎と火の粉で何も見えなくなった。次々に点火された。三本の火柱が十メートルを超え、境内は真昼の様に明るくなって、ロープの辺りには火の粉が降り注ぐ。真央自身も火の粉を被らないように思わず人の方へと身を振る。そうしたちよとした動作が波のように伝わっていき、もつと近くで観たい人と火の粉に危険を感じた人との間で反対の動きになっていった。ちようど真ん中あたりにいる人は両方からの圧力で潰されそうになり誰だろうが構わずに踏みつけにして人の肩によじ登って難を逃れようとしていた。大人ばかりでなく子供までも「あぶない」と叫んでいる。だが、多少の危険は付き物なのでオコゼ組はおどけてそのまま続けた。怖がる観客に意図的に火の粉が降るように手筒を傾けて、きやあきやあと騒ぐのを楽しんだりしていた。

ようやく模範が終わると人々は安心した。それでいったんは後方に後ずさりした場所から一気に数メートルも前に押し出された。花火が始まってからやって来た人たちもいるのでさらに人は増えている。

若衆は既にできあがっているのにさらに一升瓶から酒を仰いでいる。法被を脱いで禪姿になった。同じような格好のオコゼ組の人々と比較するとボディビルダーとニートほどにも筋肉の付き方が違っていて間近で見ている人たちの失笑を誘った。オコゼ組は彼らの足元が覚束ないのに不安になってきたのか、怒声を浴びせかけて、もつと前で、とか社殿に近すぎる、とかロープを後方にしないと叫んでいた。ひとりずつやれ！と言う。それで俺たちがサポートするから。人が多すぎて危険だ。でも聡を先頭にやんちゃな若衆は飲んでいることもあって真っ赤になって反発している。何を叫んでいるのかわか

らない。練習の時は素面だったのだ。聡は大声で叫ぶ。良いカッコがしたいのだ。

「三人一緒にやる！」「ばか聡め！」かつて私的に勉強を教えていた真央は小声で呟く。

オコゼ組がすぐ下で待ち構えるという姿で若衆はしぶしぶ納得して同じように三人が登場した。観衆は不安のなかで喝采した。点火するといきなりだった。十メートルの火柱が立つか立たないかのうちに聡はよろけて観客の方に傾けてしまった。それは意図的ではなかった。衝撃に耐えられなかったからだ。かろうじて観客への直接噴射は免れたが至近距離で火花を浴びて、不安の中した観客たちは喚きながら一気に後方へと逃げた。さきほどの数倍の力で。あとの二人も何処へ噴射するかわからない火柱を持つてよろよろとしている。オコゼ組たちは聡を集中してサポートした。すると一人がとうとう手筒をまともに観客に噴射したのだからたまらない。人々は逃げ惑い全力で後方へと進んだ。次から次へと後方の人々も波のように逃げ惑った。或る人々は屋台に突っ込む形になった。たこ焼き屋やお面の店は吹っ飛んだ。香具師たちは怒りを露わにして防ごうとしたがとても無理でとうとう屋台は潰され、火の着いたコンロがひっくりかえり幾つかが出火した。バーナーがテントに引火してしまったのだ。すぐさま消防がサイレンを鳴らす。境内は混乱してパニック状態になった。今度は空いている社殿前や社殿の後ろの林に向かって人々が突進してきた。水を掛けようとしていた世話役たちは散りぢりになった。横になった手筒は勇敢な何人かの観客がはいたり蹴ったりしてようやく鎮火したが、残る二本は社殿の直ぐ脇にまで後退せざるを得ずオコゼ組たちが火を消すころには相当の火の粉を藁葺屋根に噴射したあとだった。不安に駆られておそろおそろの関係者が社殿を眺めていると火花の火が消えたのにまだ明るく、宵闇を焦がしはじめてるのが見えた。埃を燃やしているような臭いが漂う。屋台の消火に消防本隊と団員は向かっている。人々はどうしていいのかかわからず社殿の周りに集まってくる。花火見物は火事見物に変わった。だが、まだそれに気が付いている人は僅かであった。それにすぐに消火できるだろうと思っていた。屋台のテントは燃え広がっており鳥居の辺りは真っ赤に染まっていた。社殿の周りの人々は神社入り口の火事を眺めて騒いでいた。真央は押し潰されそうになりながらようやく社殿に辿り着きほうほうのいでいで他の人たちと共に賽銭箱の隣りで休んでいた。神社世話役たちは巫女たちに帰りなさいと指示している。世話役の何人かが集まって、花火は中止ということが短い談議で決まった。

中止と言うことが正式に告げられ、子供連れなど身の危険を感じた人たちがようやく帰り始めた。何人か怪我人が出たようでも担架も持ち出され救急車のサイレンも鳴り響く。今頃になって半鐘が割れんばかりに打ち鳴らされた。

屋台の火は消防が消し止めた頃、裏山の子供たちが転がるように降りてきて社殿の屋根が燃えていると言いはじめたのだ。観客のほとんどが社殿の方を指さして燃えていると口々に叫んでいるではないか。今度は社殿内部がパニックになった。はしごが駆けられ若衆たちがバケツを持って屋根に向かって様子を見に行く。だが、既に遅かった。バケツの水くらいでは焼け石に水だった。社殿にはほとんど誰もいなくなった頃にも真央はいた。目の前で相変わらず目を輝かせて今度は報道写真を撮影している理紗。こいつは狂っていると真央は思った。真央が残っているのは、消防士の村上の活躍が見たいからだ。ライバルがここにいるのだから引くわけにはいかない。

社殿内部の温度が上昇する。消防車は人で身動きができない。ホースを伸ばしているの

はわかる。とうとう屋根が抜け落ち火が落ちてきた。中空が見える。誰もいないだろうと思っていたら宮司が奥で何かごそごそとしている。真央は奥に入り声を掛ける。「何してるのですか？焼け死にますよ」

「もうダメだろうか。神体だけでも持ち出そうかって思って。全部燃えるってことはないと思うが、重くてひとりでは動かないから手伝ってもらえないか」

祭壇の奥の奥まで入り込むと木簡のようなものに草仮名で意味不明の言葉が綴られている。小さな木箱だった。中を開けると破れて腐り掛けている巻物が出てきた。

「これ？ なんですか。わかりました。早く逃げましょう」

「この神社は末端だからいたしたものはないがなあ。そうそう、こっちだぞ。重いのは」黒々とした葛籠はびくともしないくらい重い。蓋をしておけば燃えないんじゃないのだろうかと思う。

「この際だからいいことを教えよう。ここにいるのは山姥なんじゃ」

「……嘘」

「開けてみて確認したらどうだ、自分の眼で。わたしが許可する」

真央はおそるおそる蓋を取る。眩暈のする異臭が漂う。数十年も前の空気なんだ、と真央は思う。セルロイドが溶けたような茶色と黒の樹脂に固められている。手足などは小熊の掌のように小さくて何が何か分からない。顔は茶色くムンクの「叫び」のようにほとんどが口で占められている大きな穴が開いているだけだった。眼球はあったのだがそれはすぐにガラス玉だと分かった。

「こんなの猿の剥製にガラス玉を埋め込んだだけじゃない。狒狒なんでしょ」

全長は八十センチほどだ。いつのまにか真央にくっついてきた理紗は写真を撮影する。

「よせ」宮司は制止した。

「あんた天罰がくだるぞ」理紗は奇妙な微笑を浮かべている。

「これは誰にも秘密なんじゃ」神官でさえ知らないようだった。宮司は理紗に飛びかかり捕まえ羽交い絞めにした。真央は理紗の手からカメラを奪い取って、憎しみを込めて何度も叩き付けて破壊した。

「用はないんだからさっさと帰れ」宮司は理紗を離して吐き捨てた。理紗は、カメラを回収することもせずに茫然として立ち去った。

「山姥って狒狒だったんですか。大猿ですよ」

「君はあの時心の底から山姥を悼み、姥捨ての風習の不条理を感じていたんじゃないのか。少なくとも私にはそう見えた。投げやりになったり諦めたりしてはいけない」

「ううん」真央は考え込んだ。

理紗ほどではないにしろ、あたしも理紗に近くなっているということだろうか？

「本当にこれを持ち出すんですか？ びくともしませんよ」

「ではこれでくるもう」敷いてあった莫莖を丸めてふたりは山姥をくるんだ。乾燥しきっていた。危うくバラバラになってしまふところだった。

「わたしの聞いたところではこれはやっぱり人間のミイラなんだよ。先代の宮司から聞いた。誰にも話してはならない」

祭壇の天井が破れて火の塊が落ちてくる。どのみち外へは持ち出せない、社殿の前方には炎が駆け廻り燃え盛っていた。数人の人々が真央たちに気付いて早く逃げろと声を漕ら

して必死に呼びかけている。全体が倒壊するぞと怒鳴っている。

「ありやあ」人々はまたパニックに陥っていた。

一部が焼け落ちて崩落を始める頃に放水がようやく開始された。真っ先に飛び込んできた黒い影は消防署員の村上だった。彼の瞳は強い使命感を帯びていた。

「ここで死ぬのは勘弁してほしい」真央は言った。

「裏だ、裏木戸を破ればすぐ外に出られる」

「いえ、裏もちよつと燃えているんですけど」

村上は僅か数秒で祭壇まで辿り着く。

黒い人影が炎の中に見えた。近くなる。防火服に守られた村上だった。

「何をしているのですか？あ、あなたはさっきの」

「神体を避難させようと思って」

「そんなことしてる場合ではない。もう一挙に倒壊しますよ。死ぬんですよ！三人とも」

村上は山姥を抱えて炎の中に葬った。

眼にもとまらぬ速さで真央を抱きかかえると炎の中を戻っていく。

「着いて来て」宮司もよろよろと後に従った。

「責任をとって死のうと思っていたんじゃないんですか。でも御嬢さんを道連れにするのはよくないでしょう」

「いやそんなことは断じて思っていない」

真央は失神するかのようなエクスタシーを感じた。もしこのまま焼け死んでも構わないのではないかと。このままの状態が続いたらどんなに幸福かshれないだろう。男の逞しい腕に抱かれるのは初めてだったから。業火にに焼かれて村上の腕と真央の脚とがくっついてしまうのを望んだ。何か痕跡がほしい。

宮司の背中には炎が巡っていたから、助かってしばらくのたうちまわっていた。人々がバケツの水を何度もかけて冷やした。世話役たちが何か尋ねようとすると、

「ああ、言うな、何も言うな、何も聞かんでくれ。わたしが悪かった」苦しみながら宮司は嘆願する。

真央は涙にむせいでいた。立ち上がって村上の顔を見ながらありったけの力を込めて抱きしめた。人びとは興奮して村上の勇気を賞賛していた。顔を赤らめていた。

「いえ、私は職務を遂行しただけですから」

そういつて彼が振り返ると建物の柱はぐしゃりと折れ曲がって中央から陥没して倒壊した。

「あの黒い塊って何だろう」村上は真央に訊いた。

「宮司さんが命をかけて守ろうとしたものです、それを私も手伝ったのですが、それを知ることにも冒険になるのではないのでしょうか。だから神体なんです」

「そんな大切なものを私は燃やしてしまった」村上は漠然とした災厄の予兆を感じているのだろうか。

「いえ、知らなければいいんですよ。人びとの守り神を明らかにすることが罪ならばあなたにしたことは闇に葬るといふ点では善なのです」

「いや神体はここにあるから大丈夫だ」宮司は懐から巻物を取り出す。人びとはそういう

ことかと納得する。真央が激しい痛みを腕に感じて浴衣を捲り上げると数センチの皮膚が焼け焦げていたのだった。村上が心配して手を差しのばした。小指のリングが禍々しい光を放った。

(了)